

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	有田 栄
主な担当科目	音楽教養演習Ⅰ, 音楽教養演習Ⅱ, 音楽教養演習Ⅲ, 音楽教養基礎, 音楽芸術運営基礎演習, 音楽芸術運営特別演習①, 音楽芸術運営特別演習②, 音楽研究法基礎(音楽と文化), 音楽指導論特殊講義, 音楽美学 A, 音楽文化研究Ⅳ, 西洋音楽史Ⅰ_B, 西洋音楽史特殊講義 A, 西洋文化史Ⅰ, 西洋文化史Ⅱ, 卒業研究_音楽教養, 博士音楽美学特講Ⅰ, 博士論文演習①, 博士論文演習②③
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	学部・短大においては、学生の多様な背景(文化的背景の相違、レディネスの相違、学修目的の相違)を考慮してきめ細かく指導を行い、学生自身が自発的な学修へのモチベーションを保つことができるような工夫を試みる。大学院については、音楽に関する学びの専門性に対する学生の意識を高めるため、新しい知見を取り入れるとともに、研究倫理・職業倫理等に対する学生の意識を向上させる取り組みに一層力を入れる。とりわけ博士後期課程においては、自立した研究者としての自覚を促すための教育を徹底する。
2024年の教育に関する自己評価	学部・短大の教育においては、担当する各科目で教材を見直した。学生が関心を持てるよう内容をアップデートするとともに、理解しやすい表現やレイアウトに絶えず入れ替えている。また通年科目では引き続き中間段階で授業内試験およびその追試・再試を行って、学修内容を定着させ、学修成果を「見える化」することに力を入れた。特に音楽教養コースの各科目では、コースカリキュラムの特徴を明確に出せるインタラクティブな授業内容・方法を常に模索しているが、一定の成果は上げていると考える。/大学院では、修士・博士とも専門性の高い内容を積極的に取り上げ、学生が広い視野から自身の研究やキャリアの展望を持つことができるよう指導に務めた。特に新しく立ち上げた音楽と文化コースの各授業では高度な内容の指導を行うことができ、学生の学修に大きな成果を上げられたと考える。/今年度も学部・短大・院を通じて学生の進路相談・学修相談が多かったため、できる限り丁寧に応じ、問題を学生と共に解決しようと試みた。学生支援という意味では、学部生の大学院への進学希望者の相談には、今後の教育への課題が多く含まれていることを認識しており、これを何らかの形で共有したいと考えている。特に大学院は他大学からの進学者大多数を占め、そのうちの大多数が留学生であることから、文化的背景(異なる大学の文化、異なる国の文化)の違いを背景とする課題がますます顕著に浮かび上がってきている。精一杯の努力はしているものの、教員個人のレベルで解決できないことも多く、こうした課題を今後さらに積極的に大学教学・運営組織に共有・学内発信しながら対処していきたい。
2024年のFD活動に関する自己評価	学部・短大・大学院FD委員長としてFD活動に積極的に取り組んだ。全体研修会に関しては、現代の大学教員に必要な情報や職能開発、社会から求められる資質を常にリサーチし、研修会テーマ等として積極的に提案している。分科会FDでは、教員相互の連携とコミュニケーションの向上、また修士論文の指導に関する情報共有や、卒業研究の指導に関する情報共有(いずれも特に専任教員⇔非常勤教員)等に重点的に取り組んだ。
授業改善のために取り入れた研修内容	「大学における異文化コミュニケーション」から、文化的背景の異なる学生とのコミュニケーションについての知識。

2024年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1628 教員名:有田 栄

1)アンケート結果に対する所見

担当している授業の多くが演習授業であるため、学生とのコミュニケーションはおおむね取れていると感じている。アンケートだけでなく、普段の学生とのやり取りを振り返ると、彼らもまた授業の目的や教授者の意図を理解して受講しているように見え、中には高度な内容でも興味を持って主体的に学ぼうとしている者も少なくない。その点は教員として時にうれしい驚きでもある。

2)要望への対応・改善方策

西洋文化史についての「19～20世紀以降＝近・現代の社会と文化の流れをもっと学びたい」という要望は以前から根強くあり、もはや21世紀も四半世紀過ぎたところで、ぜひ積極的に取り上げたいとは思っている。数年前にウクライナ戦争の勃発を受けて、一度実験的に現代から遡って文化史を論じてみたことがあるが、逆行の手法は、世界史の知識や見識が必ずしも十分にあるわけではない学生対象となると、それはそれで難しかった。現状のコマ数で現代文化史を吸収するのは物理的に難しく、かといって新規の開講はカリキュラムに関わる。教養科目分科会においてもこれまで「現代の世界を学ぶ」授業を「公民教育」「(卒業前に)今こそ学ぶ民法と労働法」などととも、何度か提案をしてきているが、いずれも他の教員の賛同が得られず、実現に至る見込みはないのが残念である。文化史に限らず、「現代の社会に生きる」ということをテーマとする授業こそ、いまの大学教育に必要なかと思うのだが…。

学部音楽教養の論文の授業での「論文の書き方をもっと具体的に学びたい」という要望については実のところかなり心外で、そもそもこの授業は毎回まさにそれを丁寧に教えているのだが、それにもかかわらず「教わっていない」と感じている学生がいるのはなぜなのか、他の担当教員とも話し合っただけで検証し考えてみたいと思う。この授業は、クラス全体に対する講義と、各自の課題の実施・添削・フィードバックを組み合わせ運用しているが、年々学生がなかなか授業内で自主的に課題に取り組まなくなっており、一部は課題の実施の時間を無為に過ごしているのではないかという疑念もある。学生の主体性の涵養とは矛盾するが、次年度はさらに細かく課題を与え、チェックポイントを増やすなどの工夫を試みてみたい。

3)今後の課題

大学生ならこれは当然という感覚を私自身が捨てて、レディネスとなる知識や素養が十分ではない学生、あるいはそれらがこちらの期待値とは異なる学生に少しでも興味を持ってもらうための工夫を引き続き考えていきたい。知識そのものを与えるというよりは、学びや気づきのきっかけ、動機を与えることこそ重要だと考えているが、学生自身が学修成果を自覚し、「～ができるようになった」と感じることでモチベーションが上がるような工夫、学修成果を「見える化」する工夫も次年度は考えていきたい。何か、どこかに、スイッチがあるはずだという気がしている。

以上